No.467
2004 Nov 11

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻

●今月の表紙●
angler：染谷永心君＆山岸 霞君
field：精進湖
photo:本誌・田中里史
layout：本誌・田中里史

6 特集Ⅰ 石井旭舟が少年達に贈る、とっておきの「夏の想い出」。「へら鮒浪漫街道」特別編！
夢の精進湖釣行記。

19 特集Ⅱ NEWロッド【天也翔抜】発表スペシャル。東古屋湖〜日光・丸沼〜赤谷湖…
棚網 久、秋のアドベンチャー。

182 特集Ⅲ **NEO-HERA INVITATIONAL 2004 第五戦（最終戦）びん沼川**

COLOR（カラー）

27 戦い続ける男、浅草へら鮒会、年間タイトルへの挑戦。**小池忠教 激闘の軌跡**
《第8戦》9月例会:三島湖＆豊英湖

33 **第1回 東レ将鱗へらぶなカップ 羽生吉沼**

37 **生井澤 聡＆山中いつ子の佐原水郷の四季**
《其の10》手軽に狙える洲の野原・導水路

43 新企画 チョーチン王・田中雅司の深宙奥義伝承 **魚心掌握**
Vol.2【勝つための深宙釣り入門2】椎の木湖

118,146 原始釣人・稲毛利夫＆貧果釣人・モロちゃんの純野釣り探求記！
アタリをちょーだい!!
《Vol.11》みどりが丘団地下の池、弁天沼、新沼（埼玉県小川町／嵐山町）

120 **竹とともに生きる。**
《第15回》「凡舟」作者 増井 弘

123 **杉山達也のSPLASH BEATⅢ**
《Vol.7》七井戸のセキで大型バクバク!?

128 **田辺哲男の「それってどーゆーことよ!?」**
《Vol.22》中澤 岳【イン・ザ・ボイル】第二弾 谷和原大沼

132 **吉川ひとみの「へらってヤバイわっ!!」**
《Vol.28》台風なんて吹き飛ばせ！ 加須吉沼で長竿修行!?

136 **西日本川釣り紀行 北川穂積**
《第23回》百間川・干田川・吉井川（岡山県）

139 **棚網 久 あなたの夢を叶えます。**
《第6回》「ミスターG、トーナメント決勝へ進出させて！」
ゲスト:池田武司さん 釣り場:野田幸手園

177 **戸張 誠 野釣り道場**
《第六回》【秋の三島湖・ポンプロープ】

189 本音で迫るへら用品インプレッション。**へらアイテムメッタ斬り！**
【X−TEXへら】 ㈱デュエル

190 **釣りの帰りに寄りたいお店**
《file.5》君津I.C近く【そば、めし、酒肴 ゆめ一茶の更科蕎麦】

192 **フィッシングレディ**
《今月のレディ》妹尾恵美さん 清遊湖（千葉県）

MONOCHROME（モノクロ）

49 **★エリアレポート**
50 茨戸川（北海道） 竹川正行
51 三名湖（群馬県） 本誌・伊藤洋一
53 和気の池（石川県） 山本一朗
54 宝川樋門（愛知県） 後藤 誠
55 白川ダム（奈良県） 前田誠志
56 竜門ダム（熊本県） 河口正伸

58 **あらいしのぶの始めてみようよ、へら鮒釣り**
《第19回》秋のエサってどんなの♡

62 トーナメンター小林恭之が挑む！ **竿頭までぶっ飛ばせ!!**
《第11回》マルキュー クラブ対抗 関東代表決定戦 三和新池

66 **NHCスピリット**
《Vol.14》都祭義晃 in 隼人大池

73 **江成公隆のトーナメンター、復活への道。**
《Vol.29》ENAへラ インビテーショナル（!?）in 亀山湖

82 **そんなモジリにダマされて… 天野正由**
《その11》えっ！ ネオへラ参戦!? 相模川〜びん沼川

88 **水辺のプラネタリウム 吉本亜土**
《今月の星空》「一碧金星」

93 **元気が出るへら鮒 西田美明**
《第23回》「夏が去って秋が来た」

98 **最狂へラ戦士養成所“鮒の穴” 漢（オトコ）タカハシ**
《第二十一話》
緊急報道SP【誰が放した!? ピラニア＆アロワナ捕獲大作戦!!】

102 **野田幸手園新聞**

104 **ワクワク管理釣り場情報**

108 **小売店情報**

152 竹竿＆合成竿で未開の釣り場を楽しむ！ **オデコバンザイ!?**
《その10》大久保池（埼玉県滑川町）

★へら鮒BOX
157 里ちゃんの新米編集長雑記
158 情報発信基地
160 ボイス
166 コラム『夢中と書いて夢の中』 伝道師P
167 『日研だより』 日研広報部長・遠藤克己
168 『へら狂おやじと呼ばないで』 白石和弘
169 新企画『紀州“想いの竹”のものがたり』 中峯伸行
170 第9回フォーカス懇親釣大会
172 釣果予想クイズ
174 プレゼント発表
175 広告索引
176 編集後記

※岡田 清【Deep Side Angle】は、ページの都合により今月はお休みさせて頂きます。ご了承ください。

STAFF

●Producer
根本百合子

●Editor in chief
田中里史

●Editor
大場勝良
諸冨一秋
伊藤小百合
伊藤洋一

●Planner
〈オフィス・えふ〉
藤原 肇

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆のトーナメンター、復活への道。

〈Vol.29〉

ENAヘラ インビテーショナル(!?) in 亀山湖

「一歩進んで二歩下がる!?」

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連動企画！ 〈URL〉http://hesar.yokohamatsurumi.net

最初で最後（!?）の「エナヘラ インビテーショナル」。インビテーショナルメンバーは、江成公隆、岡田 清と釣友の平山氏。実行委員長は里ちん!?

さて、先月号までの天笠 充氏との対談で江成が気付かされたことは、「無理をせず、自分の出来る範囲で、まずはへら鮒釣りを楽しむこと」であった。
そこで今月、里は江成に「休息日」を与えることを計画。のんびりと釣りでもしながら、今後の「トーナメンター復活～」の展開を考えてみよう…。それは、会社の経費を使った、江成への誕生日プレゼントでもあった。
「場所は、西湖、精進湖か、三島、豊英あたりかな…」などと里は考えていたのだが、岡田 清を交え、事態は思わぬ方向へと展開していったのである…。
名付けて、「ENAヘラ インビテーショナル in 亀山湖」!?
（カッコわりぃー！）

by 里ちん

亀山湖と私。

9月1日、房総の亀山湖へ釣行した。
小学生の時、ブラックバスを狙って夏休みに子供同士で出掛けたのが最初で最後だったから、実に20数年ぶりの釣行となった。しかしこの日が20数年ぶりの再会というわけではなかった。実は8月29・30日という直近に、職場の労組の研修というか会議というか…宴会（?）があり、小湊で一泊した。その際、往き帰りで目の前を二回も通っていたのだ。
見覚えのあるのは湖面ではなく、橋だった。
生まれて初めて乗った始発。不安な乗り継ぎ。遮断棒のない踏切。
何時間もかけて辿り着いた時、とんでもない山奥に来てしまったと思った。そして、駅を出てダムを目指す僕らの目に飛び込んできたもの。それが橋だったのだ。
バス釣りは、結局ノーフィッシュだった。真夏の減水と酸欠というタフコンディション。すでに朝マヅメを過ぎてからの釣り開始ということもあり、やみくもにキャストを繰り返す僕らに釣れる訳はなかった。しかしそれはそれでいい。大冒険は橋を見た瞬間にクライマックスを迎えていたのだから。
空調の効いたバスの中で懐かしい思い出に浸りながらも、おそらく次に来る事はないのだろうと思っていた。アクアラインのおかげで近くなったとはいえ、手前には三島湖・豊英湖がある。オデコになる危険性を考えると、亀山湖までは行く気にはなれないと感じたからだ。
28日にはすでに手元にあった本誌「へら鮒」10月号。「岡田 清ディープサイドアングル」は、亀山湖で行われたネオヘラの記事だった。釣れなくても諦めない岡田君はメチャメチャにカッコ良かったが、亀山湖の魅力を感じ取る事は出来なかった（里ちん、ごめんネ）。だから、まさか二日後に自分の車で行く事になるとは、夢にも思わなかったのである。

34。

どうでもいい事だが、当日は僕の誕生日だった。たまたま僕が9月1・2日と連休だったため、「次回の取材は泊まりでやりましょう」ということになっていた。里ちんにとっては、少しだけ空白が出来る月初は都合がいいのだ。「一杯やりながら男二人でお誕生日なんかお祝いしちゃいますか～」などと調子のいい事を言っていた里ちん。取材というのは建て前であり、完全に遊びだと認識していた筈である。が、殺人的に忙しい月末を乗り切るためには最高のニンジンであっただろう事は想像に難くない。里ちんも人間である。ご褒美は必要なのだ。
だが、里ちんの奥様もまた、人間だった。休日返上での取材、連日徹夜での編集作業。確かに忙しかったのは里ちん本人かもしれない。しかし彼を支え、待ち続けた人もいる。
「アニキ、やっぱ泊まりは無理っぽいっス…」
里ちんにとって、下手をすれば月に一度あるかないかの家族サービス。僕に止める権利はない。女房に日帰りになったと告げると、「当たり前だ、ヴォケッ！」と厳しい言葉が返って来た。どうやら僕も救われたらしい…。

岡田 清、ご乱心!?

取材日は9月2日ということになっていた。8月31日昼の時点で取材場所は未定だったが、岡田君からの電話で事態は一転した。
「江成君、取材場所決まった？ え、まだ？ じゃ、亀山湖で決まりっ！」
「……。だってこないだ誘ったら、1日は仕事休めないって言ってたじゃん？」
「今日から浅いタナのダンゴで食っちゃってるらしいんですよぉ。50アップも出たんですって！ たった今電話もらったんですけど、もう居ても立っ

てもいられない〜って感じで。当日は午後から仕込みですんで、僕は午前中だけの釣りってことになりますが」

「好きだねぇ…。体壊しちゃうぞ…!」

「かめやまかめやまぁ! リベンジリベンジぃ!」

「いや、俺はリベンジ関係ないですよ…。それに取材は2日になったんだけど…」

「まぁたそんな事言ってぇ〜! 50オーバーだよ、50オーバー! 誕生日に記念の1枚を釣ってもらおうかなっていう僕の気持ちをどうして分かってもらえないのかなぁ!?」

結局、岡田君の友達を思う気持ちと鼻息に押され、亀山湖行きが決定した。取材日も急遽変更。

岡田君はとってもナイスガイで、カッコ良さも連載の通りだが、実はただの「へらバカ」であることを、ここに暴露する。

岡田君のへらバカの虫に、僕と里ちんの虫も触発されないわけはない。

「アニキィ! こうなったら泊まっちゃいます!?」

日帰りになったと告げた時の女房のリアクションが頭をよぎったが、元々泊まりの予定だったんだし…。で、メールで女房に連絡。

「もう帰ってこなくてよろしい」

ひぇ〜! 慌てて里ちんに連絡し、再度女房へメール。

「やっぱり日帰りにしました」

「もういい!」

仕事から帰ると女房はすでに寝ていた。この日の晩飯は抜きのようだ。仕方なく釣りの準備を終えると、すでにいい時間に。今回も一睡もせずに出発。最悪の誕生日だ…。

夏の初体験!?

実は、僕にとって一発大型狙いは初めての体験となる。少しは興味はあったものの、結局やらずにここまで来てしまっていたのだ。正直な話、かなりナメていた。

「三年二組」という言葉は知っていた。大型べらの強烈な引きに対抗するにはそれ位の号数セッティングが必要という事だが、日頃から道糸でさえもコンマ以下の号数を常用している釣り人にとっては、全く理解出来ない領域である。僕も道糸で1号は使うことがあっても、ハリスで1号は考えられない。ましてや2号だなんて…。里ちんにその事を告げると、「ハリスは0・6や0・8で大丈夫ですよ〜。みんな切られた切られたって騒いでますけど、全部スレですよ〜。食ってりゃ上がりますって!」というお気楽な言葉が返ってきた。最大1・2号しか手元になかった僕は、力強いその言葉に安心した。が、今となってみれば、この男も何も分かっちゃいなかった…。ネオへらの取材を通していったい何を見ていたのだろう…。

当日の朝、「1・2の0・6」という僕のセッティングに、岡田君は大いに不満そうだった。岡田君は「三年二組」でこそないものの、「2の1・2」という、僕のほぼ倍強度のセッティング。「絶対無理無理!」と言いながら、小物入れから道糸とハリスを取り出し、僕に仕掛けを作り直すよう説得した。岡田君にそこまで言われては、僕も断れない。好意は（ブツも）ありがたく頂戴し、ボートに乗り込んだ。

50上ク

岡田君と同行の平山氏の勧めもあり、向かったポイントは「院下」。型モノが多く潜む一級ポイントだそうだ。オダが多く、なるほどムード満点である。

僕はよそ見をしながら漕いでいたため、岡田君と平山氏より少し遅れてポイントに着いた。それでもモジリは頻繁に出ている。前日から食いが立っているという情報は本当かも?（本当です!）と、興奮がおさまらない。

で、いつもの僕なら、目の前のオダにさっさとロープを結んで釣り支度を始めてしまう所だが、この日の僕は意外に冷静な部分もあり、しばらくモジリと泡づけを見ていた。初めての釣り場であることがそうさせたのか、それとも「出るか、デコか」という釣り場の特色が僕に余裕を与えたのかは分からないが、結果としてこれは大正解であった。

僕の眼前には、大きく分けて3つのオダがあった。最も沖に張り出し、なおかつ舟付けが最も楽そうなのは真ん中のオダだったが、どういう訳かこのオダだけ全くモジリがなかった（後で分かったのだが、実はこのオダこそ、岡田君がネオへらで付けたオダだったのだ）。不穏な空気を感じ、真ん中のオダを避けて手前のオダに入釣。

朝イチからへら釣りもせず、最近完全にハマっているバス釣りを堪能していた里ちん（しかし、完デコ♡）が、どこからかフラフラと戻ってきた。

浅いタナを攻めていた僕はこの時点で、実はなぜだか放流べらがイレパクになっており、里ちんは「アニキ〜、湖を間違えてません? ここは三島じゃないっスよ!?」などとほざいている。「こうなったら数で50上狙っちゃったらどうっスか? それもある意味凄いことっスよ! ギャハハ〜♡ よーし、オチは決まった。後は楽しむのみ!」…はて? 朝から相当に楽しんでいた筈なのだが…。まぁ良しとするか。見ると、里ちんは鼻歌まじりで当然のように隣の（真ん中の）オダにボートを付け始めた。僕は朝のモジリを忠告したが、「こういう時って、後から入った人がボーンと巨べらを釣っちゃうもんなんですよ! そして、それが僕なのだ♪」と、全く耳を貸さない。そして見事にアタリオデコ…。他人事ながら、野釣りの深さを痛感。「人柱って事っスよ! ハハハ〜♡」という捨て台詞を残し、里ちんはまたどこかへと消えていった。この男、会う度に図太くなっていく…。

グルテン、春夏秋冬!?

全く攻められていない素直な放流べら。冗談抜きで、50枚を突破するのは簡単な地合だったと思う。しかしそれでは亀山に来た意味がない。では、全く楽しめなかったのか? といえば、それはノーだ。ジャミの中から、へらを引き抜くという野釣り本来の面白さを久し振りに味わえたし、里ちんに与えられた50枚オーバーという目標も喜んで受け入れた。すでに何枚もリリースした後だったがフラシを降ろすように言われれば素直に従った。へらは確かにたくさんいた（小さいが）が、地合は自分で作り出したという満足感もあったからだ。

打ち始め、ブルーギルの猛攻に対しては、ボソエサへと手直し。さらに、大きめのウキへの交換。これでウキの動きは大分メリハリがつき、ときおり力強いカラも出るようになってはいた。しかしどんなに時間が経っても、たまに竿を曲げるのはブルのみ。「へらは必ず居る筈だ」もしかするとダンゴは食い切れないのかも知れない。ハリも大きすぎるのかも知れないが、大型狙いが本当の目的である以上、サイズを落とす気にはなれなかった。

そこで、ブルに捕まる心配もあったが、グルテンを試す事にした。最近へら釣りを覚えた人なら、「両グル」ならいざしらず、クワセとして「夏にグルテン?」と思うかも知れないが、野釣りでは一年中バッグに入れておくのは常識。とりあえず「α21単品」。昔の僕なら「ザ・グルテン単品」というところ。基本である。

グルテンを付けての第1投は、いきなり寝ウキだった。「やっぱりブルに捕まっちゃうんだよな〜!」と竿を立てると、何とへら。がっくり一転びっくり。釣れたのは綺麗な放流もので、2枚半〜3枚で1キロといったところ。狙いの大型でないとはいえ、亀山で初めて顔を見せてくれたへら。嬉しくない筈がない。感謝しながらそっとリリース。その後もブルとへらが交互に釣れて来るようになった。こうなってくると、大型を釣るという目的はどこかへ飛んでしまい、どうしたらへらの

確率を高められるのか、という興味が頭をもたげ始める。

で、色々とやってみた。タナをエレベーターしてもあまり変化は見られない。次はハリスの長さと段差を微調整。これも余り意味がないようだった。そこで、軽いグルテンとバラケの落下のタイムラグのせいでタナが凝縮されないのだろうと想像した。ならば、超・短バリスか？　いや待て、野釣りでは数える程しか成功した事がない。北城さんも言っていたじゃないか！

では、上下のハリスを縛ったらどうだろう？ウキ止めと同じ要領でトンボを結んでみる。これは僕が良く使う手で、名付けるとすれば「簡易クマ取り仕掛け」になるだろうか？　いや、絡み防止どころか絡みの元になると言えるので、クマ取りはマズいかもしれない。トンボから上の部分を道糸に見立てれば、むしろオモリ飛ばしに似ている…と、そんな事はどうでもいい。

結果から書くとこれは大失敗で、ブルすらアタらなくなった。この事から、へらもブルもグルテンがゆっくりと落下するからこそ反応して（追えて）いたのは明らかである。振り返ってみれば、ダンゴの時はブルだってまともに釣れてはいなかったのだ。グルテンをスッとタナに入れる事さえ出来れば、へらがアタってくれるという勝手な思い込み。上層にブル、その下にへらという構図を思い描いていたが、それは幻想に過ぎなかった。へらもブルも同じタナに同居していたのだ。となると、もう釣り分けは無理かも知れない…。

ここでふと、大昔の入門書の記述を思い出した。僕が所有するその入門書には、段差釣りのメカとして「距離」だの「拡散範囲」だのという言葉は出てこない。書いてあるのは「時間差」という概念だ。しかも段差釣りは、ジャミ対策に有効とまで書いてあったのを思い出した。それは、動きの早い（活性の高い）ジャミは早くナジむバラケの芯に寄せ、ジャミに遠慮するように後から寄ってくる（ような活性の低い）へらには、やはり後からゆっくり落下してくる集魚材の入っていないクワセを食べてもらう、というもの。かなり都合のいい解釈のような気もするが、今日はこれが正解だったようだ。

トンボを解き、下ハリスを一気に延ばす。すると、グルテンへ換えてからの第1投のように寝ウキにこそならなかったが、落下途中の怪し気な（メーター規定なら違反スレスレのような）アタリが連発し、乗ってくるそのほとんどがへらという状態になったからだ。僕は釣りをしながら思った。冷静に考えれば、「時間差＝距離感」と言えなくもない。どこからの距離なのか、という点に違いがあるだけなのだ。ある意味馬鹿にしていた大昔の入門書だったが、とんでもなかった。大反省、である。

【アテンションぷり～ず❶：大きめ&デブトップウキへの交換】

江成いわく、ウキの交換はブルの層を通過させるためと言うより、大きなボソエサを引っ張り降ろすためのバランス重視が目的なのだ。さらに、江成が日頃標準としているウキのサイズではボソエサに変更する前から、ナジんでからのウキの動きにかったるい違和感を覚えていたという。その原因を江成に分析してもらうと、「アオコも出ていて、当初は水の粘度が大きいのかと思ったけど、糸が太い事によるオモリ量の減少のせいだと気付いた」そうだ。例えば0.6号と1.2号では、抵抗面からウキの立ち上がりに大きな違いが出るのは皆さんご承知の通りだが、背負うオモリ量もかなり変化するという事実を見逃してはいないだろうか？　江成が感じた「かったるさ」とはすなわち、「仕掛けが自分のイメージする動きが出るまで張っていない」という事になる。チャカチョーチンのように、その「かったるさ」を逆手にとった釣り方も存在するが、ジャミの活性の高い状態で選択する事は余りないだろう。

と、ここで終わらないのが、マニアックな「えな理論」だ。頭痛がするのでまっすぐ帰りたいと言いながらも立ち寄った蕎麦屋で、頼んでもいないのにベラベラとまぁノーガキをよく喋ること！　よっぽど楽しかったらしい（ま、冗談はともかく、里ちんもちょっと感心したので載っけときました。以下、その続きです）。

「かったるさはとれたものの、イマイチ納得がいかない。今度はハリとトップの太さのバランスを疑ったよ」

そう、この日は大型狙い。江成がチョイスしていたのはヤラズとグラン鈎で、号数は共に「8」。ハリなしバランスをトップ付け根にとる方は多いと思う。しかしそれでは浅いタナ用のウキの短いトップだと、通常のトップ径ならハリを付けると沈没か、もしくは沈没寸前になってしまう可能性があるのだ。

「ちょっと大きいかなってくらいなら、オモリを切って合わせちゃうよね。結果として空バリでボディが見えちゃうのは気にしない。ハリを付けてトップ付け根っていうセッティングだってあるわけだから。ただ、自分の感覚では基本的に、ひとハリひと目盛ないし、ふたハリ3目盛だね。ムクならひとハリふた目かな」

そこで江成は、何のためらいもなくデブトップをチョイス。後半戦の底釣りでもこの考え方を貫いた。終盤、里は江成の底釣りを間近で見ていたが、デブトップで釣っていると言われなければ気付かないと思える程、見事な底釣りらしい動きであった。

…久し振りに江成の釣りをじっくりと見させてもらった。初めての釣り場で魅せた、付け焼き刃では決して得る事の出来ないその柔軟な発想とバランス感覚。たいしたもんです、ハイ。

後日談。電話で「デブトップの件は囲みで紹介するので、本文は短かめに」と伝えると、江成は恥ずかしそうに、こう答えた。

「いやぁ目的は全然違うかも知れないけど、10月号の小池さんの記事を読んでいなかったら、迷わずにデカウキを選択出来たかどうかは疑問だね」

江成もまた、熱心な「へら鮒」読者であった。里ちん感涙♡　…でもアニキ、原稿いつもより長いっスよ？字のサイズ落とさないと入らないっス。またクレームが…。

by 里ちん

新バージョン登場!!　**【セミロングスタイル・ソリッドムク】**

熱い要望に応え、ついに登場。
速攻の両ダンゴから段底まで、用途は自由自在！
●ボディは羽根2枚合わせ6㎜径で必要十分な浮力
●厳選されたスローテーパー1㎜径ソリッドムクトップ
●サイズ：一番（T20㎝ B8㎝ カーボン足8㎝）
　　～五番（T28㎝ B14㎝ カーボン足8㎝）
●好評発売中（問い合わせは下記釣具店まで）　定価1本6,825円（税込）

へら浮子 杉山作

取り扱い店〈五十音順〉
埼玉・越谷 かわせみ（☎048・969・5067）　茨城・下妻 こやの釣具（☎0296・44・1619）　東京・渋谷 サンスイ川釣り館（☎03・3499・5025）
埼玉・入間 へらの三水（☎042・964・2093）　栃木・益子 フィッシングハウスほその（☎0285・72・2215）　神奈川・川崎 鮒仙人（☎044・287・7470）
東京・吉祥寺 丸勝（☎0422・22・8923）　東京・青梅 吉川釣具店（☎0428・22・2467）

横張り。

お昼前頃、平山氏の携帯が鳴り、「何？　底釣りだったの？」という氏の声が聞こえてきた。どうやら昨日の50上は底釣りで出たらしく、岡田君は何か勘違いをしていたようだ。

正直言えば、短竿浅ダナで大型狙いというのは僕のイメージに合っていなかったので、平山氏の会話はちょっと嬉しい情報だった。

初めての釣り場にも関わらず水深計を持参しなかった僕は、周囲を見回す。段々畑のようになだらかなカケアガリの場所もあるようだが、自分の真後ろはほぼ垂直の崖である。しかし自分がボートを留めているのは崩れオダなので、元からの断崖絶壁＝ドン深というわけではなさそうだ。しかしどの程度の傾斜から崩れたのかは想像が付かないし、この崩れがどこまで続いているのかも分からない。もしかなり先まで続いていたとしても、メクラオダに根掛かりして釣りにならないかもしれない。「とりあえず丈八くらいで様子を見てみるか…」。そんな事をぼんやりと考えながら、とりあえずウキをチョーチンの位置へ移動させる。底に少しでも近付けておこうという助平根性だ。と、ナジミが出ない。いくらなんでも丈一で底が取れるわけはない。「やはりオダか…」そっと竿を上げると根掛かりはしなかった。念のためにもう1投するとやはりナジミはゼロで、何の抵抗もなくすんなりと仕掛けは戻ってきた。まさかと思いながら、タナ取りゴムで入念に計測。掛かりの全くない、フラットな素晴らしい「底」が、「そこ」にはあった。大急ぎでウキをチェンジ…。

エサの重さとアンカーの度合いを見るために、とりあえず上バリトントンで再開第一投を送った。ナジミ切り、ワンテンポおいてやや戻しかけた次の瞬間、「ツン」と一節綺麗に落とされた。アワセた瞬間のそれまでとは明らかに違う異様な重さ。心臓が高鳴り、アドレナリンが分泌されているのが自覚出来る。突然やってきたドラマに、僕の掌が一気にベタベタになっていくのが分かるのだ。竿が滑らないよう、力強く握りしめる。握りが潰れてしまうんじゃないか、と思えるくらいの力。そうでもしないと竿を持っていかれてしまいそうな圧倒的なスピードとパワー。ほんの数秒間だったのかもしれないが、一気に突っ走るという敵の第一撃をかわした僕には、初めて体験するその強烈な引きに対し「もしかしてメーター級のコイ？」と疑う余裕さえあった。しかし次の瞬間、僕の興奮は最高潮に達する。コイと疑われたことへ、「俺はへらだよ」と主張するように始まった強烈な横張り（※里ちん註：たぶん（よこばり）と読む。以前、故・藤田東水氏が好んで使っていた言葉で、へらがヒラを打つような様を表したもの。江成はこの言葉がお気に入り）。体高の低い魚種では感じる事の出来ない、体高が高い魚種であっても口にハリがかかっていなければ決して感じる事が出来ない独特のヒラ打ち。紛れもなくへらだと、スレではない、と確信した。「ゴン、ゴン」という右へ左へのストロークが大型魚ほど大きいのは管理釣り場では経験済みだったが、これほどクイックで大きなストロークは経験がなかった。第一撃をかわせた事から取り込めると踏んでしまった僕をあざ笑うかのように、「ゴン」の度に僕の竿は水面に近付いていった。そして一度も立て直すことは出来ないまま、ついに竿は水面と平行になり、仕掛けは限界を超えた…。

このとき僕が使っていた仕掛けは、1・2の0・6。岡田君の好意を無にしたカタチになってしまったが、僕には自信があった。多摩川育ちの僕は、60㎝オーバーのコイを何度も0・6で仕留めた経験があったからだ。実はこの日の亀山でも、納竿間際に50㎝クラスのコイを取り込んだ。しかし認識を改めなければならないようだ。同サイズなら、コイよりへらの方がパワーがあるという事を。昔の教科書では、竿の弾力が働かない平行移動で逃げる（下に潜らない）ために、マブナやコイよりもへらの引きは強く感じると書かれていたが、「感じる」どころではない。明らかに圧倒的なパワーの差があるのだと思い知らされた。

しばらくの放心の後、その振れ幅を思い返す。それは以前、某管理釣り場で釣った50近いサイズに酷似していたが、実際はどうだか分からない。そのへらよりはクイックだったという事実を、スピードでストロークを補っていたと考えれば、もっと小さいサイズだったのかもしれない。さらに言えば「姿見ず」である以上、へらであったという保証もどこにもない。しかし、だからこその楽しみがあってもいい。全ては自己満足なのだ。

この時ちょうど僕の正面に回っていた里ちんに向かい、僕は思わず絶叫した。

「明日もやりて〜！　いや、毎日やりて〜！　ちっくしょ〜！（意味不明）」

釣りにしばらく行かないでいると、どうしても行きたいという強い気持ちがなくなってくる。ひと月ぶりのこの日も、正直言って直前の準備も面倒臭かった程だった。それでも釣り場に出向いてしまえば、本当に全てを忘れて没頭出来る魅力が、この釣りにはある。魅力というより「魔力」、いや「毒」といった方がいいかもしれない。家に置いてきた家族のこともすっかり忘れて釣り惚けていた僕には、このあと夫婦史上最大の危機*を迎えようなどとは知る由もなかった…。

（*里ちん註：現在は円満だそうです…）

後の祭り。

底は宙よりへらの気配が薄く、代わりに様々な魚種の外道*が僕の竿を曲げた。それでも底で型モノが出ることが分かった以上、宙に戻すことは出来ない。枚数での50上というインスタントな目標は、即・却下となった。

へらの気配が薄いことが、かえって大型の期待を高めていた。同じ大型狙いのNHCでは寄せ過ぎない方がいいケースが多い気がしていたからだ。しかし、今回の亀山では全く逆の傾向が見られた。大型は、放流物の回遊と密接な関係があるようだった。まず、へらしいサワリが頻繁に出だす。そして何発かカラをもらったあと、放流物が何枚か釣れる。と、大型の接近は近い。最初のバラシの後、僕は納竿までにへらと思われる大物を3回

【アテンションぷり〜ず❸：スペシャルデカバッグ】

江成の特注ホワイトバッグはデカい。とにかくデカい。意味もなくデカ過ぎる…。メーカーのオノダケース史上二番目にデカいというから、ハンパではない（え、これより大きいのがあるのかよ！）。
小型ならクーラーボックスまでスッポリ。野釣りでは便利かもしれん。いや、歩行距離の少ない管理釣り場の方が、むしろ合っているのか…。ちなみに、里はこのバッグが満タンになってるところを見たことがない。無意味だ…。
どう考えても、やっぱりデカ過ぎると思うのは僕だけだろうか…。　*by 里ちん*

【アテンションぷり〜ず❷：帽子は必ず被りましょう】

本人、「似合わない」と思っているらしく、江成はあまり帽子を被りたがらない。しかしこれは身体に毒です！　帽子を被らないなら、せめてパラソルをさしましょう。それも嫌なら、足を水中に浸けましょう。ラジエーターがわりになります。（鮎釣りで日射病や熱中症が少ないのはこのためです）。水分補給も忘れずに！
日焼けによる頭皮の痛みも頭痛もピークに達し、仕方なくパラソルを出した江成。江成は今夏、すでに2回も頭皮がムケているらしい。きったねぇ…。
by 里ちん

掛けたが、全てこのパターン。しかもアタるタイミングが早かったのも共通で、そのタイミングは底に着くかどうかというものだった。雑誌の記事を読むと、野釣りでは結構こういうパターンが多いようだが、今回の僕も実感した。

合計4度のチャンス。内一回は明らかにスレなので仕方ないと思うのだが、僕は全てモノに出来なかった。4枚目をバラした後、さすがに0・6号のハリスには限界を感じた。遅すぎると思われるかもしれない。しかし、瞬間的なハリス切れが一度もなかったため、何とかなるのではないか？という思いを断ち切れずにズルズルと来てしまったのだ。この日は持参しなかったが、「純正竹や合成竿ならば、もうひと踏ん張り出来るかも」という思いもあった。しかし、おそらくこの日の最大（最強）の4枚目をバラし、やっと悟った。ドラグの調整で糸をくれてやることも出来ない以上どうにもならない、と。一本釣りで狙う「巨べら釣り」は、自分の想像を遥かに超えたビッグゲームであった。

ついに仕掛けの交換。といっても、とりあえずハリスだけ0・8へ上げただけ。この期に及んでもまだ1号以上へ上げられない自分がおかしかったが、僕の悪い予感は的中することになる。交換後は放流べらどころか、外道すらほとんどアタらなくなってしまったのだ。

かなり以前、相模湖に通う常連の方と、こんな会話をしたことがある。

「釣ろうと思えば仕掛けを落とせばいくらでも放流もんは獲れる。一束だって夢じゃない。だけどそれじゃぁ大型が来た時やどうもならん」

「仕掛けをゴツくすると放流物はアタリを出さないんですね？　放流物は、地べらの大型よりズルいって事なんですかねぇ…」

「バカこけ（笑）。大型の方がズルいに決まっとる。でも仕掛けを落とせば、大型もいくらかは口を使ってくれるんよ。だけどそれじゃぁ獲れない。そこでテメーの技量と相談して、どこまで仕掛けを落とせるのかってこった。太くすればそれだけアタリも減るんだ。どこで線引きするか、だな」

この日は「たったコンマ2」の差であった。仕掛け以前に、ちょうど地合が終わってしまっただけなのかもしれないが、それはもう誰にも分からない。引っ掛かるのは、同行の仲間の中で僕だけ数釣りを楽しめてしまっていたという点だ。岡田君、平山氏は、巨べら狙いの極太仕掛けである。（里ちんは細仕掛けだったが、放流物1枚で終了…）。これも場所が良かっただけかもしれないし、本当にたまたま僕だけが地合を作り出せてしまったのかもしれない。しかし…大型のチャンスが4回もあったのもまた、僕だけなのだ。

釣れているという情報に、「待った」はない。その場で全てを放り投げて駆け付けなければチャンスはない。とはいえ、そんな恵まれた人は多くない。が、今回僕らはラッキーにもその「翌日」というタイミングでの釣行となった。「翌日」でさえ全ては終わっている可能性はあったが、次の休み、次の週末よりは全然マシである。そして実際に、チャンスは残されていた。それなのにモノに出来なかった。

亀山湖に完全に魅了されてしまった僕は、おそらく近い内にまた釣行するだろう。しかし今度こそ、大型狙いの厳しさを知ることになると思う。放流べらさえもアタってくれない厳しい現実に直面した時、僕の巨べら釣りへの適性がわかる筈だ。

〈*里ちん註：この日の江成の釣り物＝へら　マブナ　半べら　コイ　ニゴイ　ウグイ　ブルーギル　ブラックバス（アッパー）の8種類！　by バスオデコ&チビ放流物1枚の里ちん〉

「トーナメンター復活への道。」というタイトルながら亀山湖に出掛け、「えな理論」で放流物を釣りまくった挙げ句、底釣りでは（たぶん）巨べらを逃しまくり、しかし、思いっきりノウガキをタレまくってくれた江成。はっきりいってメチャクチャだが、しかし、この自信満々の江成こそ本来の江成である、と里ちんは思うのです。「トーナメント参戦編」でコケまくり、自信喪失気味だった江成の目を覚まさせた天笠氏との対談、そして、へら鮒釣り、いや、魚釣り本来の魅力に気付かせてくれた岡田氏と亀山湖に感謝、である。やっぱりアニキはこうでなくちゃ！　して、来月からの展開は…。お楽しみに！

by里ちん

【あ、テンション！❹：底釣りゼミぷらす】

テンションが大事だと説いた底釣りゼミでの北城理論だが、実は「穂先からウキまでのテンションの保持」の仕方に注意が必要なのだと、亀山湖での江成の底釣りを見て気が付いたので、補足しておきたい。
ウキと道糸のジョイント部分から穂先までの間は、なるべく水平に保って欲しいとのこと。浅い底釣りではあまり意識しなくても水平に近くなるが、竿天上の位置にウキがある場合、うっかりウキを吊ってしまうケースがあるのだ。「吊ろうが水平だろうがテンションをかけるんだから同じ」ではない、と江成は言う。吊ってしまうと明らかにアタリが殺される、と感じているそうだ。中には水平にするとウキを支点とした「くの字」が大きくなると懸念する方もいるかもしれないが、「くの字」は「ウキから下」だけ注意すればOKなのだ。ラインを水平に保持するために、水中に浸かる部分が増えるケースも予想されるので、特に竹竿系にはあまりいいとは言えないですね…。
by 里ちん

岡田氏は中小べらを釣り、エナヘラを満喫!?　狙いの大型は釣れなかったが、「いやぁ楽しかったなぁ。また来ようかなぁ」と言い残し、焼き鳥の仕込みをするために元気に横浜へと戻っていった。で、夜中までお店で焼き鳥を焼きまくるのである。この人、ホントに鉄人である…

釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名～75名	60,000円
76名～100名	65,000円
101名～125名	70,000円
126名～150名	75,000円
151名～175名	80,000円
176名～200名	85,000円

・仕上がりは黒一色です
・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

1.ぐりへら鮒会
2.ぐりへら鮒会
3.ぐりへら鮒会

・番付をインターネットで公開できます（無料）

お問い合わせご注文はお早めに！

取扱店：柴　舟　03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに

転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円～
2回目以降同じものをご注文の場合は3,500円～

・8書体、8色を御用意しています
・角印も作れます

取扱店：
柴舟（東京都江戸川区）
03-3613-2727
佐伯釣具店（神奈川県川崎市）
044-911-3722
SANSUI川づり館（東京都渋谷区）
03-3499-5025
フィッシング中原（神奈川県川崎市）
044-711-8266
鮒仙人（神奈川県川崎市）
044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com

平成16年11月1日発行（毎月1回1日発行）　第39巻 第11号
昭和41年5月4日第三種郵便物認可

へら鮒釣りの楽しさを追究し続ける…

へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna

No.467
2004 Nov
11

夢の精進湖釣行記。

石井旭舟が少年達に贈る、とっておきの「夏の思い出」。

特集
名手・石井旭舟がいく
へらぶな浪漫街道
特別編

特集Ⅱ がまかつPRESENTS
NEWロッド【天也翔抜】発表スペシャル。
東古屋湖～日光・丸沼～赤谷湖…
棚網久、秋のアドベンチャー。

特集Ⅲ
NEO-HERA INVITATIONAL 2004
最終戦　びん沼川オープン大会
柳 栄次、
大逆転劇でアングラー・オブ・ザ・イヤー獲得！

新連載
第四回マルキューチョーチン王座決定戦優勝。
スペシャリストによる深宙奥義伝承!!
田中雅司【魚心掌握】

つり鮒
Monthly fishing magazine herabuna
11 2004
昭和41年5月4日第3種郵便物認可
第39巻第11号（毎月1回1日発行）
平成16年11月1日発行
定価 一〇〇〇円 本体九五二円

石井旭舟が少年達に贈る、夢の精進湖釣行記。

(株)へら鮒社

つれるエサづくり一筋
マルキユー

セットのバラケに、新たな力。「粒戦（つぶせん）」、近日登場。

猛烈に寄せる。貪欲に食わせる。

タナを安定させながら、これでもかとばかりに寄せまくりたい。
冬のセット釣りでも、積極的にガツガツと食ってくるようなウキの動きを出したい。
だったら「粒戦」。セットのバラケにプラスする、新たな専用ペレットです。
へらの本能を刺激する、視覚へのアピール力を備えて。
近日、いよいよ登場です。

近日登場

バラケに加える粒状ペレット
●粒戦（つぶせん）

マルキユー株式会社
〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4
お問い合わせ 本社・桶川工場：048-728-0909 大阪支店：072-824-0909
四国営業所：0877-44-0909 九州営業所：0942-82-0909
ホームページアドレス http://www.marukyu.com/
釣り場でエサに困ったら iモード・ホームページ http://www.marukyu.com/i

雑誌 07907-11
4910079071145
00952